

所員自著紹介

1. 孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』
(人文学研究所叢書 42), 東方書店, 2019年3月, 345頁。

本書は、清末から中華民国、そして満洲国の成立を経て、中華人民共和国が成立された直後の一九五〇年代頃までの中国人留学生の諸活動を、近代的な概念である「国家」、「愛国」、「近代」を模索する観点からとらえ直そうとする日中関係史共同研究の成果の一部である。

日本を含む東アジア諸国は、欧米諸国がもたらした近代化の波に立ち向かうため、欧米へ留学生を派遣することで新しい制度と技術を導入するという方針を打ち出した。日本の場合は、まずドイツに向けた留学が始まり、二〇世紀に入るとアメリカへの留学が急激に増え、中国の場合も欧米の新式軍艦と武器の導入を狙った留学生の派遣の動きが一九世紀の中頃には始まり、多くの留学生が日本を目指した。

この日本に押し寄せた中国人留学生の諸活動を明らかにすべく、編者らは神奈川大学人文学研究所の中に同好の士と共に「中国人留学生史研究会」を始め、その後、共同研究の成果として大里浩秋・孫安石編で『中国人日本留学史研究の現段階』(二〇〇二年)、『留学生派遣から見た近代日中関係史』(二〇〇九年)、『近現代中国人日本留学生の諸相:「管理」と「交流」を中心として』(二〇一五年)の論文集を三冊、上梓することができた。これらの論文集で議論した内容は多岐にわたり、一々紹介はしないが、日本の外務省外交史料館が所蔵する日本側の資料と台湾の国史館が所蔵する清国の学部(後に中華民国の教育部)関連の一次資料を中心に、新たな資料と視点を提示しようと努力したつもりである。

研究会では日本と中国との間の不幸な歴史の展開に翻弄される中国人留学生が話題になったこともあれば、留学経費や医療費の実態を論じ合う場面があったり、地方各省の同郷会組織が果たした役割について議論したり、戦後の留学生が置かれた苦悩、具体的に言えば、国民党と共産党の間で一つの政党を選択しなければならなかった現実など、あらゆる側面からの討論を積み重ねてきた。そこで中国人留学生が、清末の時期から中華人民共和国が成立する時期まで、絶えず自問せざるを得なかった思想的課題は、「国家」と「愛国」、そして「近代」という概念ではなかったか、という意識を徐々に共有してきたといえる。

今回の各論文においてもできるだけ以上のような問題意識を共有することに努めた。

「第Ⅰ部 中国人留学生と『国家』の発見」に収められた三本の論文は、初期の中国人留学生によって組織された清国留学生会館、勵志会・訳書彙編社といった諸団体を具体的に取り上げるとともに、中国人留学生が書き残した日記を通して留学生の生活に迫り、彼ら留学生がどのように「国家」という概念を認識し、中国人としてのアイデンティティを確立して行ったのか、について検討したものである。

「第Ⅱ部 中国人留学生と文学——『愛国』を求めて」では、中国人留学生の文学作品などから、「国家」と「愛国」の問題を取り上げている。後に汪兆銘政権に協力し「漢奸」になったとされる張資平の作品や鄭伯奇、穆木天、郁達夫など日本に留学した経験を持つ文学者が描いた作品、そして中国人留学生により東京で設立された学術団体の「中華学芸社」がいずれも近代的な意味において「国家」と「愛国」の問題に苦悩する中国人留学生について触れていることは興味深い。中国人留学生研究はこれまで歴史、政治、教育分野で扱われることが多いが、留学生が数多くの文学作品を残していることを考えれば文学研究からの視点も重要である。

「第Ⅲ部 戦争と混乱の狭間でみた『近代』」は、中国と日本の関係が破綻し、国家と民族の対立が先鋭化した時期の中国人留学生問題を取り上げている。それまで中国人留学生として受け入れられていた

彼らが、満洲国の建国以来、もう一つの国家のアイデンティティーを持つよう強制させられた苦悩は想像して余りあるものである。満洲国留日学生会の活動と対支文化事業における日本側の記録を駆使した二つの論文は、このような屈折した歴史の動態を検討したものである。結局、中国人留学生は、一九四五年の対日戦争からの勝利と一九四九年の中華人民共和国の建設以降においても引き続き、国家（国民党か、共産党か）と愛国の選択に悩まされていたのであるから、国家と愛国、そして近代の問題の重要さがよく分かる。

本書を作る基礎になった神奈川大学中国人留学生史研究会は、会の結成からほぼ20年にわたり活動を継続しているが、新たな資料の発掘と議論は今でも続いている。中でも今まで最も多くの先行研究があるとされる清末期の研究についても、新たな一次資料の発掘と知見が続くことは予想だにしていなかったことであつた。今後も新たな研究に向けた努力を積み重ねていきたい。

本書刊行後、以下の学術雑誌に書評が掲載された。

- (1) 書評・柴田幹夫、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（『神奈川大学評論』第93号、2019年7月）
- (2) 書評・佐藤由利子、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（『アジア教育』、第13巻、2019年11月）
- (3) 書評・石田卓生、『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（『中国研究月報』、第861号、2019年11月）

最後になつたが、本書の出版に向けてご支援いただいた神奈川大学人文学研究所、神奈川大学共同研究奨励金、科研・教育交流（基盤B・一般、課題番号17H02686）には、とくに感謝申し上げます。

（孫安石）

2. 上原雅文（編著）『自然・人間・神々——時代と地域の交差する場』

（人文学研究叢書43）御茶の水書房、2019年3月25日、277頁

本書は、共同研究グループ「自然観の東西比較」が、神奈川大学共同研究奨励助成金の交付を受けて行った研究（2015年度～2017年度）の成果論文集である。以下、本書の意図の内容について、「はじめに」で書いたことをもとに概括する。

近代以降、自然科学・技術は、自然を有用な資源と見る機械論的自然観を基盤にして発展し、人類に多大な利福をもたらし続けている。しかし一方、土壌や大気・水・森林などにおける環境破壊をも生じさせている。また近代の自然観は人間観とも連動し、人間をも資源と見なして利用する傾向を世界的なレベルで強めている。特定の地域の土地や人間の文化の固有性を無化し、収奪の対象とする植民地主義は終わってはいないともいえる。資源をめぐる国家間の対立は激化し、民族的・宗教的な対立も絡んで、解きほぐしがたい状況を呈してきている。問題の解決のためには、キリスト教とギリシア哲学を背景にして成立した機械論的自然観の相対化が必要であり、その形而上学的背景の再検討も必要であろう。以上のような問題意識のもとに、我々は、自然との関わり方を、様々な時代や地域の固有性を視野に入れつつ、「人間」、「自然」、「神々」の3項を軸として、つまりは認識主体のあり方をも俎上に載せて、存在論的かつ根源的に探究しようとしたのである。

本書は、8名の執筆者が、機械論的自然観以外の、時代と地域で異なる固有の文化（自然観）を様々な論じている。従って、本書の諸論文は方法的にも領域的にも多様である。執筆者の専門領域は、ドイツを中心とした西洋近代哲学、日本思想史、イタリアなどを中心とした比較文学・芸術、イギリス文学を中心とした昔話・物語研究、宗教改革期のイギリス史、捕鯨問題を軸とした環境倫理、現代のイスラ

ーム社会・文化、中国の風水思想と、多岐にわたっている。本書の副題に「時代と地域が交差する場」と名付けた所以である。(上原雅文)

3. 中村隆文『リベラリズムの系譜学——法の支配と民主主義は「自由」に何をもたらすか』
みすず書房, 2019年4月16日, 288頁

本書は、哲学史、法思想史、政治思想史上の「自由」を求める思想と運動の変遷をたどりながら、「自由」の在り方とその可能性について論じたものである。「自由を最大限保障しようとする（自由への干渉を最小化する）」という理論的立場をリベラリズム (liberalism) と位置づけ、そこにはどのような種類のものがあるのかを、それぞれの共通点と差異を示しながら分類・分析している。おおまかな流れとしては、古代ギリシアのソロンやアリストテレス、アウグスティヌスやキケロにはじまり、中世のイギリスの自然法論や、近代のロックの社会契約論やJ.S. ミルの自由論を経て、現代でいえばロールズの『正義論』やマイケル・サンデルのロールズ批判、さらには昨今流行しつつあるリバタリアン・パターナリズムや「ナッジ」まで、さまざまなものを取り扱っている。

本書のポイントとしては、①社会的に求められるところの「自由」という概念が充実したものとなってゆく背景には、法の支配と民主主義との二本柱が機能していること、そして、②両者のバランスこそが必要で、一方が強力になりすぎるとはバランスを崩し、そこから自由の否定につながりかねないこと、というものである。リベラリズムとはどのようなものであるのか、そして、現代の「リベラル」というものが、個人の自由と解放とを求めるリベラリズム本来の趣旨とどの程度まで合致しているのかに興味がある人はぜひ本書を手にとってもらいたい。(中村隆文)

4. 後田多敦『救国と真世——琉球・沖縄・海邦の史志』
琉球館 (Ryukyu 企画), 2019年5月15日, 324頁

本書は2000年から2018年までの諸雑誌に掲載された史論や歴史エッセー、批評などをまとめたもの。タイトルのキーワードの一つ「救国」は、19世紀末の明治日本による「琉球処分」に対抗する琉球救国運動から取り出した。もう一つの「真世」は「まーゆ (まゆ)」と読み、石垣島における「豊穰の世」などを表現する語。本書を簡単に要約すれば、「豊穰の世」を希求する琉球の人々の歴史的な営みと、大国の間でゆれる現実の琉球の位置や歴史について論じたものである。

ただ、単なるエッセーや史論集ではない。本書で紹介している事例や史料は埋もれていたものや初出のものも多くあり、新しい史料・史実の紹介も含んでいる。その点は、「滅亡国の歴史」をどう叙述するか、という問題意識からの試みでもある。前著『「海邦小国」を目指して——「史軸」批評による沖縄「現在史」』(出版舎 Mugen, 2016年)の姉妹版。

全体として3章+付記の構成。第1章の「海邦の群像」では、琉球救国運動やその周辺の人物を掘り起こし、史実を含めて紹介している。第2章「海邦と沖縄の間」では日本との関係史のなかから、沖縄の現状までを論じている。第3章「真世とみるく世界報」では、琉球史の枠組みにかかわる王権や祭祀、明・清との冊封関係、琉球処分や東アジアとの関係などについて話題としている。付記「救国運動の人物誌」では、これまで埋もれていた琉球救国運動にかかわった人物の情報を整理し収録した。

(後田多敦)